



このドキュメントではバージョン6.8.2で新たに追加されたコマンドについて説明します。

### SMTP\_Auth

---

SMTP\_Auth(smtp\_id;authUserName;authPassword) → 整数

| 引数              | タイプ  | 説明                         |
|-----------------|------|----------------------------|
| smtp_ID         | 倍長整数 | → メッセージのリファレンス             |
| authUserName    | 文字列  | → 「SMTP Auth」 認証に使用するユーザ名  |
| authPassword    | 文字列  | → 「SMTP Auth」 認証に使用するパスワード |
| Function result | 整数   | ← エラーコード                   |

SMTP\_Auth コマンドを使うと認証が必要な SMTP サーバへ、引数<smtp\_ID>で参照されるメッセージを送信することができます。認証が必要でないサーバに対しても利用可能です。実際には引数<UserName><authPassword>が空でない時にしか認証処理は実行されません。

このコマンドは、“CRAM-MD5” や “PLAIN and LOGIN” のような認証機構を利用可能です。いくつかの SMTP サーバで要求されるこのタイプの認証機構により、改ざん、なりすましのリスクを軽減します。これは特にスパムメールの不正リレー行為への対抗策となります。この機構は、ユーザは特に意識せずに利用できます。

引数<smtp\_ID>は、SMTP\_New コマンドで作成されたメールメッセージへの倍長整数の参照番号です。

引数<authUserName>は SMTP サーバへの認証付きログインのユーザ名です。値にはドメイン名は含みません。例えば、“jack@4d.com”なら、引数<authUserName>は “jack” です。

引数<authPassword>は SMTP サーバへの認証付きログインのパスワードです。

注：もし引数<authUserName><authPassword>が一方でも空だと、SMTP\_Auth コマンドは何もしません。

▼このサンプルコードは、メール送信処理に際して、4Dデータベースの特定のフィールドの内容に応じて臨機応変に認証付き／無しのアクセスを行っています。

**C\_INTEGER**(\$vError)

**C\_LONGINT**(\$vSmtpl\_id)

**C\_STRING**(30;\$vAuthUserName;30;\$vAuthPassword)

\$vError:=**SMTP\_New**(\$vSmtpl\_id)

\$vError:=**SMTP\_Host**(\$vSmtpl\_id;"wkrp.com")

\$vError:=**SMTP\_From**(\$vSmtpl\_id;"herb\_tarlick@wkrp.com")

\$vError:=**SMTP\_Subject**(\$vSmtpl\_id;"Are you there?")

\$vError:=**SMTP\_To**(\$vSmtpl\_id;"Dupont@wkrp.com")

\$vError:=**SMTP\_Body**(\$vSmtpl\_id;"Can we have a meeting?")

　このフィールドには、認証機構を使用しているサーバである場合にのみ、  
　何らかの値が保持されています。認証機構を利用しないサーバの場合は空です。

\$vAuthUserName:=[Account]AuthUser

\$vAuthPassword:=[Account]AuthPass

\$vError:=**SMTP\_Auth**(\$vSmtpl\_id;\$vAuthUserName;\$vAuthPassword)

\$vError:=**SMTP\_Send**(\$vSmtpl\_id)

\$vError:=**SMTP\_Clear**(\$vSmtpl\_id)